

〔共同研究：地域文化財の掘り起こしと活用の研究〕

日本仏教揺籃の地としての南大阪（Ⅵ）

行基の足跡（1）

梅 山 秀 幸

学生のころ、折口信夫の『死者の書』を読んで、それにいざなわれるように、奈良の当麻の里にしばしば出かけ、歩きまわったことがある。中将姫の伝説をもつ「当麻曼荼羅」はもちろん謎めいて好奇心を刺激したし、伝えられているとおり、聖徳太子の弟の麻呂子王の草創だとすれば、法隆寺に匹敵する古い由緒を持つ当麻寺のひっそりと静まった暗いお堂の中で、古風な四天王像の忿怒の眼差しにも弥勒菩薩の穏やかな表情にも、青年期に特有な驕慢をたしなめられもし、またともすればデスペレートになった感情を癒されもした。境内に出て歩きながら、色づいた紅葉の影から姿を現した三重の塔のたたずまいは今でも目に焼き付いている。当時の当麻の里の風情もなつかしいもので、それが何を意味するのか調べないままに、民家の玄関先には半紙に朱で人びとの手形を捺したものが貼り付けてあったのを思い出す。

そして、夕刻、空を深紅に染めて荘厳と二上山に沈んでいく夕陽。

それは「当麻曼荼羅」、すなわち「観無量寿経变相図」の説く浄土に往生するまず第一の方法である「日想観」を促すものであった。『観無量寿経』は次のようにいう。

「仏、韋提希に告げたもう、『汝および衆生は、まさに、専心に、念を一処に繫けて、西方を想うべし。いかに、想いをなすや（と言わば）、およそ、想いをなすとは、一切衆生の、しょうもう生盲にあらざるよりは有目の徒、うもくみな、日没を見る。まさに、想念を起し、正坐し、西に向いて、諦らかに日を観ずべし。心を堅住し、想いを専らにして、（他に）移さざらしめ、日の没せんと欲して、（その）げんく状、懸鼓のごとくなるを見よ。すでに日を見おわらば、目を閉じても開けても、みな、（日没のかたちを）明了ならしめよ。これを〈日想〉となし、名づ〈初観〉という』」

二上山の向こうには西方極楽浄土があると、大和の人びとは浄土への想いを駆り立てられる。七宝の楼閣があり、観音・勢至の二菩薩をしたがえた阿弥陀如来がいまし、清浄な池には蓮の花が咲き乱れ、天人たちが音楽を奏でている。愁苦に満ちた現世とは別の歓喜の世界が山のかなたにあって、この世の終わりとともに、そこに生まれ変わることができるという幻想を味わうことができる。しかし、『観無量寿経』の「観」とは、それこそ観念、すなわちイメージーションを意味していよう。すべて苦しみも喜びも心のもちようである

キーワード：行基、瑜伽唯識、土塔、四十九院、三島由紀夫

とすれば、イマジネーションは現実よりも真実であり、強靱なイマジネーションは現実を克服する力をもつこともできよう。

それから三十年後、私は二上山のまさに西側を、朝の太陽が東に昇るのを眺めながら通勤するようになった。かつて幻視の中にあった西方浄土がありふれた日常生活の場になったわけだが、しばらくして、私のいるそこが確かに一つの仏国土であったと思うようになった。それが、この論考を書き続けている理由なのだが、さらに最近のこと、泉北高速線で深井の駅にさしかかると、真東に二上山の姿があり、その雄岳と雌岳の間から朝日が昇る。私と二上山を結ぶ線上に大野寺の土塔があるはずだと気が付いた。その線をさらに西に私の背後に延長すれば、その線上に行基が生れた母の家を寺にした家原寺があるのではないか。そして、まことに迂闊というしかないが、「深井 (fukai)」という地名そのものが、仏に水を供えるために行基が掘った「関伽井 (akai)」の転訛したものではないかと思いついた。和泉地方の仏国土が一つのくっきりとした輪郭を取り始めてきたのである。ここには行基を中心として仏法を信奉しつつ日々の生業にいそしむ人びとのコミュニケーションがあったはずである。

土塔について

大野寺の土塔は忘れられた存在であったようである。大阪府教育委員会編『大阪府の文化財』（1962年）は「史跡大野寺土塔の保護」の項で次のようにいう。

「大野寺の東南に、当時の考古学会では土塔方形墳などと呼ばれ、古墳と認められていた特異な方錐状土山があったが、昭和二十七年頃になってその東北隅角から採土破壊が頻りとなった。それが稀有な塔婆形式の土塔そのものであることを確認した本府教育委員会では、その保存に努力を傾注した。その土壌および敷地の買収について府費予備費の支出を画し、幸い十月十日には土地所有者および土地買収者から、買収の契約を了するまでにこぎつけ、永劫の保存を期しうることとなった。そして翌二十八年一月十七日には史跡の仮指定をおこなった。ついで文化財保護委員会あて史跡の本指定を申請し、同年三月三十一日付で官報告示があった。これが本府において、またおそらく全国的にみても地方庁が史跡等の買収保存に踏み切った最初の事例であった」

高度経済成長下の宅地開発、道路整備などで、多くの文化財が失われたことはいうまでもないが、この土塔も存在価値を認められず、荒れ果てるにまかされ、危うく姿を消すところだったのである。方錐かつ段状で特異な形をしているとはいえ、この地方におびただしくある古墳の一つだと考えられ、住民たちが土を採取して破壊するままに放置されていた。大阪府教育委員会のこの本は、地方自治体として予算を組んでその保護に乗り出したのは画期的な事例であったと幾分かは誇らしげに語っている。そして、墳墓と考えていたのは誤りで、その調査の過程で、土を盛った塔婆であることがわかったのである。『大阪府の文化財』はまた「大野寺土塔の実測調査」の項で次のようにいっている。



現在の土塔

「堺市土塔町の真言宗大野寺から、道をへだてた東南の畑中に、土塔または塔山と呼ばれる方錐状の堆土がある。この寺は神亀四年、僧行基によって建立された大野寺の法燈を継ぐものであり、この堆土は、家原寺に所蔵する重要文化財『行基菩薩行状絵伝』の大野寺の部分に、その原形の描きとどめられている土塔そのものである。昭和二十七年、大阪府教育委員会ではこの土塔の緊急保護措置として、史跡仮指定をおこなったが、そのため実体を把握する必要がある、堅田直氏に嘱して、寺跡一帯と土塔そのものの地形測量をおこなった。現状では土塔の東北隅角は、はなはだしく採土せられ、また周囲の畑地耕作による蚕食があって、その形態を損じ、高さ九メートル、東辺長五十二メートル、西辺長四十八メートル、南辺長五十七メートル、北辺長五十三メートルを測るが、元来は辺長五十メートル強を有したことが推測された。そしてその断面に現れた柱状土層から、その層数は十三重であったことも確認された」

日本において、法隆寺や薬師寺を始めとして木造の塔は珍しくはないものの、土の塔は珍しい。玄昉の頭が落ちて来たところという奈良の高畑の頭塔は有名だが、そちらは『東大寺要録』の新薬師寺について述べるところに、「仁聖皇后（光明子）之建立也。実忠和尚西野建石塔」とあり、周りに石仏があるために「石塔」とするが、実忠が建てたものとして、かつては広がったらしい新薬師寺の境内に属するものと考えられていたらしい。現在はこじんまりとした新薬師寺の本堂の門前には鏡神社があり、そこに祀られるのが反乱を起こして殺され、怨霊となり、九州に左遷されていた玄昉を食い殺した藤原広嗣であることを考えると、玄昉の頭の落ちて来たところという言い伝えには何か意味のあるものらし

く、一笑にふす気にはなれない。私は三月とはいえまだ寒く雪の残る若狭でお水送りの行事を見たことがある。小浜郊外の神宮寺の関伽井で関伽（水）を汲み、遠敷川の鶴の瀬に注いで奈良の東大寺の二月堂下の若狭井まで送る、二月堂のお水取りの前段階の行事である。お水取り、すなわち十一面観世音菩薩悔過会は、それこそ実忠が始めたものとされるが、小浜から奈良まで地下を通して水が届くなどと発想して人びとに信じこませ、そして千三百年後の今もそれを続けさせている実忠は、現代のシニカルな感覚からいえば食わせ物なのだが、やはり古代の人びとの敬虔な心性からは真実と考えられたのであろう。実忠は呪師として貴い存在と考えられて、またその効験も持ち合わせていたのだと思われる。玄昉も中国で高度な唯識の思想を学んで持ち帰った有為な学僧でありながら、政治と高貴な女性たちに深入りし過ぎたばかりに大宰府に左遷されて不慮の死を遂げざるを得なかった、都に帰ることなく死んだということでは天神（菅原道真）さんの先例であり、広嗣と同様に鎮魂すべき存在ではあった。その鎮魂に実忠がかかわったとしてもおかしくない（さらに付け加えれば、新薬師寺の本尊のあの沈鬱な薬師如来はなぜか行基作と言い伝えられている。同じく唯識を学んだ同時代者でありながら、玄昉と行基は対照的な生き方をしなければならなかった。行基作という伝承にも意味がありそうである）。

その頭塔は方二十四メートルというから、方五十メートル強の大野寺の塔の方がはるかに大きいことになる。なぜ、行基はそのように大きな土塔を造ろうとしたのか、井上薫氏は「和泉国大野寺土塔の源流」（『奈良大学文化財学報』第1集 1982年）において、西安の慈恩寺の大雁塔の影響を指摘している。おそらくその通りであろう。

塔の意味 玄奘が伝えたもの

遠くインドに求法の旅に出た玄奘和尚はインドで無数の塔を見た。アショカ王は八万四千の塔を建てたといわれるが、玄奘和尚が北インドに入って、^{ランパ} 濫波国が^{ナガラハル} 那揭羅曷国にたどり着く。するとまず、

「那揭羅曷国は東西六百余里、南北二百五、六十里あり、山が周辺を周り、峻岨な山にへだてられている。国の大都城は周囲が二十余里ある。命令する大君主はなく、^{カーピシー} 迦畢試国に隷属している。穀物が豊かに花や果が多い。気候は暑熱に、風俗は質実である。勇猛果敢で、財貨を軽んじ学を好む。仏法を篤く敬い、異道を信じるものは少ない。伽藍は多いけれども、僧徒は僅かである。もろもろの^{ストウーパ} 窣堵波は荒れはてて壊れている。天祀は五カ所、異道のもの百余人である」

と、その国の概観を述べる。国の規模を述べ、その境域は険峻な山がめぐり、首都としての城市があるけれども、主権をもつ君主がいず、カーピシー国を宗主国としていて、人々は仏教を信奉しているものの、もろもろのストウーパが荒れ果てているという。そして、次のような記述が続く。

「城の東方二里のところ^{アショカ} に窣堵波の三百余尺のものがある。無憂王（阿輪迦王）が建てた

ものである。石を畳んで非常に高く、彫刻をしてりっぱに作ってある。[むかし] 釈迦菩薩が然燈仏にお会いしたとき、鹿皮の衣を地に敷き、髪の毛を敷きひろげて [然燈仏の通路の] 泥を掩い、受記（未来に仏になるという予言）を得たところである。日月は [すでに] 破壊劫の長きを経たけれども、この遺跡は滅びることはなかった。時には斎日にあたり天より種々の花を雨とふらし、群衆は心よりきそって供養を行なうこともある。その西の伽藍には少しく僧徒が居る。その南の窠塔波はむかし [釈迦が髪の毛で] 泥を掩った地である。無憂王が大通りを避けて側に建てたものである。

城内に大きな窠塔波の基礎の跡がある。これを先達たちの話に聞けば、むかしは仏の歯が収納されていて高くもあり広くもありりっぱだった、ということである。今はすでに歯はなく唯基礎の跡が残っているだけである。その側に窠塔波の高さ三十余尺のものがある。人々の言い伝えによれば何時のころからとも知らないとのことで、空から下りてきてここに高く基礎したという。人間の造ったものとも思われず、まことに靈瑞が多い。

城の西南十余里に窠塔波がある。[むかし] 如来が中印度から虚空を凌いで遊行教化し、この国に遺跡をのこした。人びとはそのあとを慕ってこのありがたい塔を建てたのである。その東、遠からざるところに窠塔波がある。釈迦菩薩がむかし然燈仏にお会いし、ここで花を買って [て然燈仏に供養し] たところである

まだ菩薩の位にあった釈迦が然燈仏に出遭って、鹿皮の衣を敷いたところと髪の毛で泥を覆ったところに大小の卒塔波ストゥーパがあり、大きなものは三百尺あまりもある。釈迦の歯を納めた卒塔波の跡地も残っていて、その側には三十尺あまりの卒塔波があつて、人間の造ったものとは思われず靈瑞が多いといい、城の西南には釈迦が中印度から虚空を飛んでやって来てこの地に遊行教化した記念に人びとの建てた卒塔波がある。また釈迦が然燈仏のために花を買って供養したところにも人びとは卒塔波を建てた。玄奘はその卒塔波の存在を丁寧書き記し、その伝承も書き留める。

東日本大震災の起こった2011年の夏、奈良国立博物館で「天竺へ—三蔵法師3万キロの旅」と題する特別展が行われ、そこで『玄奘三蔵絵』全十二巻が展示された。全長190メートルという。フランスのバイユで、ノルマンディー公のギヨームのいわゆるノーマン・コンクエストを描いたマチルドのタピスリーを見たことがあるが、それが70メートルだというから、その三倍近くあることになる。その第三巻、雪の天山山脈を重装備で越え、さらにトカラ国を過ぎて北インドに入って、ナガラハルのこの然燈仏と釈迦との出会いを記念する卒塔婆の前に座して合掌をささげている玄奘と二人の従僧の姿が描かれている。卒塔婆の横には花の咲いている木があり、風に吹かれて舞い散っている。卒塔婆は真っ白な柱のようで、鎌倉時代の絵師、あるいは注文者は中国や日本とは材質や形状が違うということまでは理解していたようである。その詞書には次のようにいう。

「また北天竺のさかひ、那揭羅喝国の大城の東南二里に窠塔婆あり。たかさ三十丈余也。これ、如来むかし釈迦菩薩として、第二僧祇の満心に燃燈仏にあひて、髪を泥にしきて、

供養せし時、当作仏の記別にあづかり給し所也。壊劫の時にもこの跡ひとりかくるゝことなし。天花をちらしてつねに供養すといへり」

那揭羅曷国について、玄奘は健駄邏国ガンダーラに入る。那揭羅曷国と同じく、『大唐西域記』は国の概観を述べた後に、王城の布路沙布邏の外の東南方八、九里に卑鉢邏樹の高さ百余尺のものがあるといひ、

「釈迦如来はこの木の下で南面して坐られ、阿難に告げて『私が世を去った後四百年、一世に秀でた王が出て、迦膩色迦カニシカと名のり、ここより南方遠くない所に窣堵波を起てるであろう。私の体のあらゆる骨肉舍利は、ここに多く集まるであろう』と言われた」

とし、かつての釈迦の予言をいい、迦膩色迦大塔の由縁の物語を続ける。

「卑鉢邏樹の南に窣堵波がある。迦膩色迦王が建てたものである。迦膩色迦王は如来入滅の後四百年目に、天下に君臨し運に乗じて瞻部州ジャンブを一統した。[王は] 罪福を信ぜず、仏の教えを侮った。草野に出獵して白兔に出会ったところ、王は自ら追いかけて、ここ[塔のある所]までやってきたが、ふと見えなくなった。牛飼いの子供が林の中で小さな窣堵波一その高さは三尺のもの一を作っているのが目に入った。王は、

「お前は何をしているのか」

というと、牧童は、

「昔、釈迦牟尼仏が聖明なる智慧をもって『きっとある国王がこのすぐれた土地に窣堵波を建てるであろう。我が身の舍利は多くその中に集まるであろう』と予言をされました。大王はすぐれた徳を前世に殖えられ、お名前も昔の[釈迦の] 予言にぴったりあっています。りっぱな手柄とすぐれた福運とで、うまくこの時期にお会いなされました。それで私は今まずお知らせしようとしたのです」

と答えた。この言葉を言いおわるや、忽然として見えなくなった。王はこの言葉を聞き大いに喜び、自分の名が聖人の予言にあうことを誇り、それが縁で正しい信仰を發し深く仏の教えを敬うようになった。小窣堵波を周って更に石の窣堵波を建てたが、功德の力で小窣堵波を覆いかぶせようと願った。ところが石窣堵波の大きさが増加するにつれて、小窣堵波も大きくなり常に三尺は出ていた。このようにしてだんだんと高くなり四百尺を越え、その基礎が立っているところは周囲一里半、基壇は五階で高さ百五十尺になり、やっと小窣堵波を覆うことができた。そこで王は喜び、さらにその上に二十五層の金銅の相輪をたて、如来の舍利一斛(十斗)をその中に安置し供養を修した。工事がやっとおわり、見ると小窣堵波は大きな基壇の東南隅の下に横にその半分を出していた。王は心穏やかならず、すぐさま作業をとりやめてしまった。その上もとの所にもう一つ小窣堵波が出てきた。それで王は元気を落としがっかりして、

「ああああ、人の仕事は迷い易く、仏のなさることは掩い尽くし難い、み仏が扶助されること、どんなに腹を立てたところで追いつき得ようや」と言い、すっかり恥じり、自分の咎を詫びて帰った。その二つの窣堵波は今もなお現在している。病気にかかり平癒する

よう祈ろうと願う者は、香を塗り花をまき、真心をこめて帰依すれば全治のご利益を蒙ることが多い」

玄奘は釈迦を欽慕し、その事跡をたどる。釈迦の事跡が伝承されているところには、それを称揚するために、大小の卒塔婆が建てられている。名もない人びとが懇志で造った小さな卒塔婆もあれば、アショカ王やカニシカ王のような仏法護持の権力者の手に成る大きな卒塔婆もある。玄奘の『大唐西域記』はさながら卒塔婆の総目録のような観がある。そのいちいちが興味深いエピソードをもっていて、日本のたとえば『今昔物語』などの仏教説話集の種本にもなっているのだが、玄奘が学んだのは^{マ ガダ}摩揭陀国の^{ナランダ}那爛陀の僧院であった。その付近の雁塔について次のように記述している。

「^{インド}因陀羅^{ラシャイラグハ}勢羅^ハ窣訶^マ山^ハの東峰の伽藍の前に^マ窣堵波^ハがある。巨^{ハン}娑^サ（雁）と言っている。昔、この伽藍では小乗を学習していた。小乗は漸教である。それで三種の淨肉を免除していた。この伽藍は小乗の教えに違ひ、この習慣を失ってはいなかった。しかし、後々に三淨の肉は時には手に入らないこともあった。ある比丘が散策をしている時に、ふと雁の群れが飛んでいるのを見て、戯れに、

『今日は僧たちに食事は十分ではなかった。^マ摩訶^ハ薩^マ埵^ハは[もし雁に化現していただけるならば、その肉を施される]今まさにその時であることを知られるべきである』

と言った。その声はまだ終わらないうちに一匹の雁が後戻りして、ちょうどその前に身を投じて自殺してしまった。比丘はこれを見て詳しく僧たちに話した。この話を聞くものは悲しみ、みな互いに、

「如来は諸種の法門を設けて人々を機に臨み指導されましたのに、私たちは愚かにも漸教を遵奉していました。大乘は正理です。今までの習慣を改めて仏のみ教えに従うべきでしょう。この雁は教訓を垂れ、りっぱに指導してくれました。その厚德を表彰しこの事跡を永久に伝えるべきでしょう」

と言いあった。そこで窣堵波を建ててその遺業を明記し、その死んだ雁を塔の下に埋めた」

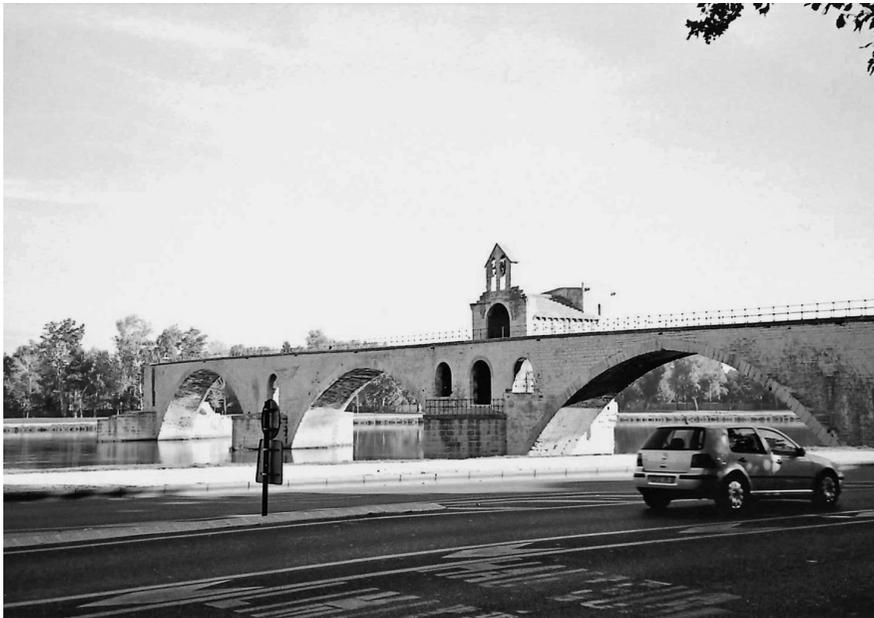
同じく雁をとり上げていて、宮沢賢治の『雁の童子』を想起させる。賢治の作品は短編ながら生命の厳かさと悲しさを書いて比類のない傑作であり、やはり大乘仏教を踏まえたものといっていざらうが、テーマはちがう。『大唐西域記』のこの逸話、註釈を参考にすると、「三種の淨肉」というのは小乗の戒律が比丘に食べることを許す肉で、その一は自分のために殺すのを見ないもの、その二は自分のために殺すと聞かないもの、その三は自分のために殺したのではないかという疑いのないもの、だとする。また、法隆寺の玉虫厨子に描かれている捨身飼虎図で虎のわが身を食らわせるのは雪山童子だが、『賢愚経』などのバリエーションでは「摩訶薩埵」となっている。いずれにしろ釈迦の前世の姿であり、雁は摩訶薩埵の行をまねて自殺してみずからの肉を与えようとして、布施行、すなわち利他の行いの極を示した。それが自利の小乗の僧たちに利他の大乗の尊さを教えたことになる。

玄奘はナランダでの修学の合間に、何度もこの雁塔を見たのであろう。修学の成果と

ともに多くの経巻を携えて西安に帰って来た玄奘はその経巻と仏像を納めるために、大慈恩寺の境内に塔を造る。それが大雁塔だということになる。玄奘が造ったものは土で作り、その表面を磚で覆ったものだったというが、内部から崩壊したので、新たに磚だけで造られたのが今の大雁塔の姿なのだという。玄奘の法燈、つまり唯識法相宗は留学して直接に玄奘に師事した道昭に受け継がれ、それがまた行基に受け継がれる。大野寺の土塔は玄奘がナールンダで出遭いみずからのものにした大乘の精神を受け継ぐことを意識して建てられたものであったといていい。大野寺の土塔は土で築かれ、周辺から瓦が発見されるから、瓦で葺かれたものであったらしい。高さが70メートルあまりもある大雁塔のように空に直立してそびえるような外観はなく、底辺が50メートル強、今現在の高さだとはいえ、9メートルしかないとすれば、緩やかな傾斜をもつ方錐としか見られない。しかし、土を使って倒れない形状を追求すれば、技術的にはこの形状しかなかったであろうと思われる。

土塔を造った人びと 女性たちの参与

法王庁のあったアヴィニョンの旧市街を囲む城壁を出ると、ローヌ川の河畔から対岸のヴィル・ヌーヴ・ダヴィニョンに架けられ、17世紀の洪水以来、川の途中で途切れた、あの民謡で有名なアヴィニョンの橋、正確には橋の建設者の名前をとった聖ベネゼ橋がある。ベネゼ (Bénézet) はプロヴァンス語でベネディクト (Bénédict) の転訛であるらしいが、ミシェル・ムール (Michel Mourre) の『歴史百科事典』 (Dictionnaire Encyclopedique



アヴィニョンの聖ベネゼ橋

橋上に聖ニコラのチャペルがあり、その下に聖ベネゼの廟がある。

d'Histoire)には次のようにある。

「BÉNEZET 聖人（1165 頃～1184 年 4 月 14 日）プロヴァンスの伝承では、近郊のヴィヴァレの若い羊飼いで、アヴィニョンのローヌ川に橋を架けよという天の啓示を受けて、周囲に懇志者を募って聖職者有志団体を組織して、1177 年から 1189 年にかけて素晴らしいアヴィニョンの橋を架けた」（一般的には Bénézet の表記が通用しているように思われるが、ムールは Bénézet としている）



アヴィニョンの橋（聖ベネゼ橋）で踊る。

あくまでも伝承により、正確な誕生年はわからないが、十九歳で死んで、橋の完成までは生きていなかったらしい。神の啓示を得て大きな仕事を成し遂げ、十九歳の若さで死んだという点ではジャンヌ・ダルクと同じである。若くて柔らかい心の持ち主の方が神の啓示を感受しやすいのであろう。聖ベネゼの場合、みずから大きな石を担いで橋の礎石としたといった言い伝えもあるが、特に橋梁建設資金を得るために駆け回って、懇志の団体（confrérie des Frères pontifes）を組織したことに彼の大きな功績があるようである。橋の上に聖ニコラのシャベルがあり、さらにその下に聖ベネゼのシャベルがあつて、今でも蝋燭の火が絶えない。

行基も橋を架け、池を掘り、港を開くなど、社会事業に奔走したわけだが、もちろん一人でそれをなしたわけではなく、彼の周りには宗教を核として組織された集団があつた。その集団の構成員を明示してくれる資料が幸いにもある。この土塔周辺で採集された人名瓦の存在である。森浩一氏の「大野寺の土塔と人名瓦について」（『文化史学会』13号1957年）という論文がある。

「堺市の南郊、仁徳陵や履中陵などの前方後円墳が郡在する百舌鳥古墳群よりわずかに離れて土塔という一集落がある。現在は堺市土塔町であるが、合併以前は泉北郡東百舌鳥村大字土師字土塔であった。この集落のなかに、真言宗に属する大野寺があつて、そのすぐ南に方形の土塔がある。この土塔及び大野寺境内など附近一帯にはおびただしい古瓦が散乱しており、その瓦にはしばしば奈良時代の人命が窺書されていることが大正時代の初年以後次第に注目されるようになり、その蒐集もさかんにおこなわれた」

まだ、その考古学的な価値が認識されていなかった時代には、勝手に採取して持ち帰ってもよかったようで、森氏のこの論文によれば、高橋健自博士の「古瓦に現れたる文字」（『考古学雑誌』5-12 1915年）でとり上げられて後も、「大野寺の人名瓦の蒐集はたえずおこなわれ、土地の百姓達も一字数円という法外な価格で売買するほどになった」という状況で

あった。そして、早熟な考古学少年であった森氏の地元のこの人名瓦との関わりが書かれている。

「私も中学生のころ、はじめて大野寺を訪れた。同じころ、古瓦の収集家としても、また研究者としても名高い堺市の前田長三郎氏を訪れて、高橋氏の紹介されておられない人名瓦を見せていただき、次第にその研究に魅了されるようになってきた。ところが堺市が空襲をうけ、前田氏宅が焼失し、これらの人名瓦の大部分は行方不明になってしまった。私達は前田氏の許可をえて、焼跡に散乱する古瓦をできるだけ集めて、勤労働員の余暇をみつけては、大八車で当時の堺中学校（現在の三国丘高校）へ運んでその散逸をふせいだ。しかしすでに主な古瓦類は古物商たちのために持出されて、人名瓦はほとんど集めることができなかった」

こうして残念なことに多くが散逸してしまったわけだが、前田氏が拓本をとっていたものや、古物商を通して現在の所有者の協力を得て、その人名瓦の「人名」を写真とともに紹介している。その名前を列举してみる。

1 秦公色夫智□ / 2 白鳥村主牛養 / 3 百濟君刀自古 / 4 大宅連□ / 5 岡田臣姪 / 6 岡田史石□ / 7 山口伊美□ / 8 片野連足嶋 / 9 坂本臣刀良女 / 10 荒田直□ / 11 大友寸主□ / 12 倉臣□ / 13 高市連□ / 14 土師宿祢□ / 15 土師宿祢茅□ / 16 平羣朝□ / 17 上村主白□ / 18 高志史□ / 19 土師知足 / 20 徒部刀自女 / 21 調大魚 / 22 淡海麻里 / 23 津守御杖 / 24 丹比在古 / 25 船大宅 / 26 神人□ / 27 茨田□ / 28 大伴□ / 29 志止理小万呂 / 30 葛木刀自古 / 31 秦玉女 / 32 丈部□ / 33 春日□□ / 34 綿野 / 35 長山 / 36 宮道 / 37 林□ / 38 板持□ / 39 本巖 / 40 法興 / 41 智雲 / 42 蓮光 / 43 蓮光 / 44 善名 / 45 行尊 / 46 徳撰 / 47 実勝 / 48 善智尼 / 49 信蔵尼 / 50 徳足 / 51 徳足 / 52 犬足 / 53 書磨 / 54 足嶋 / 55 大嶋 / 56 安衣 / 57 麻須弥 / 58 正光 / 59 県磨 / 60 賢実 / 61 東人 / 62 嶋足 / 63 刀自古 / 64 野真 / 65 弟村 / 66 葛女 / 67 平女 / 68 法良女 / 69 弟日女 / 70 椅万侶 / 71 勢明 / 72 妹刀女

以上、下部が欠損していてもほぼ解読しうる例として72例が挙げられている。39本巖から47実勝の九名は正式に得度を済ませてうるかどうかは別として僧侶であり、48善智尼と49信蔵尼はもちろん尼になるが、この二人に加えて、刀自古、刀自女、刀良女は女性であろうし、あるいは玉女、葛女など「女」字や「姪」字がつくのも女性であろう。下部が欠損して□にしているものも、そこにあった文字は「女」かも知れず、かなりの女性たちがこの土塔の建設の事業に参加していることがわかる。それが女性たちの敬虔な信仰心を語るのには勿論だが、「家刀自」たちが家政を主導していた昔の社会のありようも示している。寄付行為など、通い婚かも知れず常住していない夫の顔色をうかがうことなく、自己の裁量でできたのではないと思われる。あるいは、それだけではないのかもしれない。もっここで土を運び盛り上げてピラミッドを造ったのは男たちだけの労力だと思ひ込むのは間違っているのかもしれない。女性たちが同じように力仕事をしていてもいいはずである。

クロード・レヴィ＝ストロースに『やきもち焼きの土器づくり』と言う本がある。アメ

リカ大陸の土器づくりの神話をとり上げたものだが、この本を読みながら、この本のテーマとは別に考え込まされたことがあった。原題は《La Potière Jalouse》であり、土器づくり（Potière）は女性名詞になっているのである。アメリカ大陸では女性たちが土器を作っていた事実を端的に示している神話がある。私たちは弥生土器や縄文土器を見るとき、その作者は男性であることを前提としてはいないだろうか。岡本太郎は縄文土器の芸術性を再発見して高く称揚し、私が師事していた梅原猛先生も縄文土器の燃え上がるような生命力の表現を愛されていたが、お二人ともに制作者が男性であることを疑ってはいなかったと思う。しかし、女性たちが力感のみなざる作品を仕上げているわけではない。

行基集団を問題にすると、優婆塞・優婆夷と書かれているにもかかわらず、堀一郎氏にしても、また網野善彦氏にしてさえも男性集団をしか考えていないような気がする。人名瓦そのものがその誤りを教えてくれる。

森浩一氏はこの72枚の瓦以外に、上部や下部が大きく欠損しているものを参考として挙げている。

73 □臣□日女／74 □門連薬／75 □君百□／76 □直広□／77 豊□／78 飯□／79 連盛／
80 耳□／81 日□／82 明前／83 □自古／84 多□志／85 □忌寸虫田氣／86 □井浄□／
87 □師姉□／88 □易女／89 □玉比女／90 大王□／91 □第四竈十月十日／92 □作三十□

91と92は人名ではないようだが、ここにも女性たちが少なくとも五名はいて、□に女文字を入るとすれば、半数ほどは女性になるはずである。

行基に伝えられた教え

さて、行基という人はどのような人だったのだろうか。『続日本紀』天平勝宝元年（749）二月二日に彼の薨伝がある。

「二月丁酉、大僧正行基和尚遷化す。和尚は薬師寺の僧なり。俗姓は高志氏、和泉国の人なり。和尚は真粹天挺にして、徳範はや夙あはく彰る。初め出家せしとき瑜伽唯識論を読みし即ちその意をさとりぬ。既にして都鄙を周遊して衆生を教化す。道俗化を慕ひて追従する者、動すれば千を以て数ふ。所行ゆく処和尚来るを聞けば、巷に居る人無く、争ひ来りて礼拝す。器に随ひて誘導し、咸善みなに趣かしむ。また親ら弟子等を率ゐて、諸の要害ぬみの処に橋を造りつつみ陂を築く。聞見ききみることの及ぶ所、咸来りて功を加へ、不日にして成る。百姓今に至るまでその利を蒙れり。豊桜彦天皇甚だ敬重したまふ。詔して、大僧正の位を授けたまひ、并せて四百人の出家を施す。和尚、靈異神驗、類に触れて多し。時の人号なづけて行基菩薩と曰ふ。留止とどまる処には皆道場を建つ。その畿内には凡そ卅九処、諸道にも亦往々に在り。弟子相継ぎて皆遺法を守り、今まで住持せり。薨する時、年八十」

高志は「こし」と読むことになるが、本来的には「たかし」なのだと思う。大阪に高石市があり、今は漢字につられて「たかいし」というが、もともとは「たかし」であり、高師とか「高脚」とか書かれた。そこに蟠踞した士族として「高志」の表記をいつからか音

読みするようになり、「こし」とよびならわすようになったのであろう。母は、鎌倉時代に竹林寺の行基の墓から出てきたという舍利瓶に刻まれていた文章から、蜂田氏であり、名前は古爾比売といったらしい。行基はその母の家で生まれて、それが今は家原寺になっている。高志氏は日本に初めて文字をもたらした王仁を祖とする西文氏から分かれたというから、もともと文字に親しみがああり、朝鮮半島の文化との接触があって、早くに仏教とも親しんだと考えられるが、薬師寺に入ると、そこで瑜伽唯識論をよんで、すぐに習得したのだという。

この瑜伽唯識の教え（法相宗）はどのように師承されて来たのか、鎌倉時代に日本の仏教の諸宗派について概要を記した凝然の『八宗綱要』に依って、おぎないながら記すと、まずインドに五人の論師が存在した。如来滅後九百年、弥勒菩薩（マイトレーヤ）が兜率天から中インドに下って来て阿瑜遮那（アユシヤナ）国の講堂で五部の大論を説いたが、このとき『瑜伽師地論』をもたらした。マイトレーヤが歴史上実在の人物かどうかは問題だが、これがまず最初の論師。弥勒菩薩に次ぐ二人目の論師が無著菩薩（アサンガ）であり、弥勒の教えに詳しい解説を加え、『摂大乘論』を著した。無著は弟の世親菩薩（ヴァスバンドゥ）を小乗から大乘に転向させる。三人目の論師である世親は弥勒の『瑜伽師地論』にもとづいて『唯識二十論』・『唯識三十頌』を現した。その後四人目の論師である護法菩薩（ダルマバーラ）が現れて『唯識三十頌』に対する註釈を行い『成唯識論』の原型を作る。護法の弟子が五人目の論師である戒賢論師（シーラバドラ）であり、法相唯識宗の教えをすべて伝え、釈迦の教説すべてに通じたとされる。

玄奘法師はナーランダの僧院でこの戒賢に唯識を学ぶことになる。『玄奘三蔵絵』では、戒賢は正法蔵と呼ばれ、玄奘と正法蔵の感銘的な出会いが描かれている。

「法師、膝行肘歩して師資の礼をつくす。諸僧座してのち、法蔵のたまはく、『いづれの所より、なにの心ざしありてかきたれる』と。法師こたへたまはく、『我は大唐国よりきたれり。『瑜伽論』をならひたてまつらんと思なり』と。

玄奘がインドに渡ったのは瑜伽論を学ぶのが第一の目的だったのである。正法蔵はそれを聞いて啼泣する。なぜか。自分が護法から継承したそれを中国から学び取るためにはるばる中国からやって来る僧侶を待ちわびていたからである。正法蔵は弟子の覚賢をしてそれを語らせる。正法蔵は二十年ものあいだ風病（リュウマチ）を患っていた。苦痛がひどくて堪えられず、三年前には食事を断ってみずから死のうとした。すると、ある夜の夢に、黄金・白銀・瑠璃の三人の天人が現れる。まず瑠璃の天人が、あなたが今苦しんでいるのは過去世で国王だったとき、多くの人びとを悩ましたからであり、その罪を懺悔しながら経論の講説を続けなさい、そうすれば苦痛は消滅するといった。この瑠璃の天人は観世音菩薩だった。次に白銀の天人は弥勒菩薩であるというので、正法蔵がいつもあなたのところに行きたいと思っていたが、その願いは聞き届けられるだろうかと思ねると、あなたはひろく正法をひろめれば私の兜率天に生まれることができるだろうという。金色の天人は

地藏菩薩であり、あなたは瑜伽論などをまだ知らない人に教えなくてはならない、それを学ぶために中国からやって来る人がいるので、それを待たなくてはならないというのである。そうして夢から覚めると、リウマチは癒えていたという。玄奘法師はそれを聞いて感銘する。

「法師、このことをききて感悦はなはだしくして、『我まさに筋力をつくして習学すべし。ねがはくは、尊、慈悲をたれて教授したまへ』と申す。法蔵かさねてのたまはく、『そもそも故郷をいでてよりこのかたいくばくのとしをかをくりたまふ』と。法師、『涼燠三廻になりぬ』と申たまへば、夢の告げたがはずとて、ねんごろに誨諭したまひけり」

正法蔵も熱心に教えたし、玄奘も「筋力をつくして習学」した。「智力」でないところがむしろ真に迫っている。こうして多くの經典とともに、瑜伽唯識を長安にもちかえった玄奘のもとに、日本から道昭がやってくる。道昭と玄奘の出会いもまた感動的である。『続日本紀』には、名僧、妖僧を含めて六人の死去とそれにともなう伝記がある。その六人とは道昭（文武4年3月10日）、道慈（天平16年10月2日）、玄昉（天平18年6月18日）、行基（天平勝宝元年2月2日）、鑑真（天平宝字7年5月6日）、道鏡（宝亀3年4月2日）であるが、手もとの本の原漢文の長さでは、道昭が34行、道慈が12行、玄昉が7行、行基が12行、鑑真が18行、道鏡が18行となっていて、道昭の伝記がいちばん長い。そこに描かれる玄奘との出会いもきわめて感動的である。

「初め孝徳天皇の白雉四年、使に随ひて唐に入る。適、玄奘三蔵に遇ひて、師として業を受く。三蔵、特に愛でて、同じ房に住ましめ、謂ひて曰はく、『吾、昔、西域に往きしとき、路に在りて飢乏うれども、村の乞ふべきところ無かりき。忽ち一の沙門有り、手に梨の子を持ちて、吾に与へて食はしめき。吾啖ひしより後、氣力日に健なりき。今汝は是れ梨を持ちたる沙門なり』といへり」

玄奘は道照（『続日本紀』は「昭」ではなく「照」を用いている）を自分と同室に起居させたという。それは道照が、玄奘がインドに求法の旅に出て餓えたとき、梨をくれた沙門の生まれ変わりだからだというのだが、玄奘はさらにことばを続けた。

「また、謂ひて曰はく、『経論は深妙にして、究竟すること能はず。如かじ、禪を学びて東土に流伝しめむには』といへり。和尚、教を奉けて、始めて禪定を習ふ。悟るところ稍く多かりき。後に使に随ひて帰朝。訣に臨みて、三蔵、持てる舍利・経論を以て、咸く和尚に授けて曰はく、『人能く道を弘む。今斯の文を以て附属せむ』といへり」

玄奘は現実的である。経論を読破して習得することは難しい。だから、禪を学びなさいという。「禪」ということばも、その教えもすでにあつて、道昭を通して、奈良時代にはすでに日本には伝わっているという議論にもなりかねないが、これはしかし、瑜伽行の一つとしての瞑想をいうものと思われる。玄奘自身がインドにわたり、そのことばに苦勞しながらも学び、いま長安に帰ってさらに苦勞して翻訳作業をしている瑜伽唯識を理解するのは短期間では不可能であるというのだが、実は道昭は白雉4年（653）に渡唐して、斉明

天皇7年(671)に日本に帰ってきている。二十数年におよぶ玄奘のインド滞在には及ばないものの、かなりの長いあいだ中国にいて、瑜伽唯識も学習することができたものと思われるが、まずは瑜伽の行法を実践しなさいということだったのではないか。その道昭から行基は瑜伽唯識を受け継ぐことになる。

瑜伽唯識

行基は「初め出家せしとき瑜伽唯識論を読みし即ちその意を^{きよ}りぬ」という。いま、私の机の上に国訳一切経の『瑜伽師地論』と玄奘が講義したものをその弟子の窺基がまとめた『成唯識論述義』があるのだが、まったくもって歯が立たない。学生のころ、ヘーゲルの『精神現象学』を開いたときにも頭を悩ませたが、その比ではない難解さである。解説書を読んで、唯識思想とは、世界はただ識によって存在する、識には眼・耳・鼻・舌・身・意の六識があり、その下に末那識があり、さらにその下にすべての識を統轄する阿頼耶識が存在していて、阿頼耶識こそがすべて世界の根源だとする思想である、ということまでは理解する。その阿頼耶識とは何か、良遍の『法相二卷抄』は次のように説明している。

「阿頼耶識、これは一切諸法の根本なり。諸法の種子をおさめたもてる心なり。この心なくば諸法の種子をば誰かこれをたもたん。たもちおさむる所なくば、諸法の種子なかるべし。もし種なくばいずこより生ぜん。先の七つの心はみな種子をたもつことあたわず。この八識にとりて、先の六識は起らざる時もありあり。その様またさまざまなれども、暫く人のよく寝入りて夢見る時は眼・耳・鼻・舌・身の五識みな起らざる時なり。夢に物を見、聞き、味い、あつし、つめたしと思うは、皆第六識の分別なり。五識の起れるには非ず。夢も見えぬ程に寝入りぬれば、意識も亦滅しぬ。只彼の末那識、阿頼耶識のみあり。さればこの心は、いかなる時も起らぬという事なし。生るる時も死する時も、覚めても寝ても、長時相続して絶ざる心なり。いま此の二の心ありという事、極めて知りがたし。中にも第八阿頼耶識はきわめて甚深なり、甚細なり。この故に小乗浅近の教の中には是を説かず。大乘最極の教の中にのみ是を説けり」

学生のころ貪るようにして読んだ、三島由紀夫の『豊饒の海』四部作の中に唯識思想が展開されていたはずだと思い出して、書庫の奥から取り出して見る。もう五十年もの年月が経っていることに感慨を禁じ得ないが、三島由紀夫は1970年11月25日の朝、この四部作の最後の『天人五衰』を書き終えると、市ヶ谷の自衛隊に乗り込んでひとしきり自衛隊員に蹴起するようクーデタを呼びかけるアジ演説を行った後、割腹自殺を遂げた。この『豊饒の海』四部作は平安時代の物語である『狭衣物語』にヒントを得て、輪廻転生を物語の軸にして構成されている。第一作の『春の雪』の紅顔の美青年の松枝清頭は恋のために二十歳で死んで、第二作の『奔馬』の右翼青年の飯沼勲は暗殺を試みて失敗して二十歳で割腹死する。第三作の『暁の寺』のタイの同性愛に耽る美しい王女のジン・ジャンも二十歳で蛇に噛まれて死ぬが、松枝清頭と同級生であった本多繁邦は飯沼勲ともジン・ジャン

ともかかわって、清顕が死んで勲が生まれ、勲が死んでジン・ジャンが生まれ、ジン・ジャンが死んで、しかも三人ともに右の脇下に三つの黒子をもっていたことにより、これら二十歳で死んだ人間の輪廻転生を信じる。最終作の『天人五衰』の灯台員の少年の安永透も同じように右の脇の下に三つの黒子をもっていて、本多繁邦は彼をジン・ジャンの生まれ変わりではないかと考えて養子として引き取る。

『暁の寺』の中で、本多の述懐として、

「さるにても唯識は、一旦「我」と「魂」を否定した仏教が、輪廻転生の『主體』をめぐる理論的困難を、もつとも周到精密な理論で切り抜けた、目くるめくばかりに高い知的宗教的建築物であつた。その複雑無類の哲学的達成は、あたかもあのバンコックの暁の寺のやうに、夜あけの涼風と微光に充ちた幽玄な時間を以て、淡青の朝空の大空間を貫いていた。

輪廻と無我との矛盾、何世紀も解きえなかつた矛盾を、つひに解いたものこそ唯識だつた」と、三島由紀夫らしい華麗な比喩を用いながら彼自身の唯識論が展開される。

「もし迷界としての世界の實有が、究極の道徳的要請であるならば、一切諸法を生ずる阿頼耶識こそ、その道徳的要請の源なのであるが、そのとき、阿頼耶識と世界は、すなはち、阿頼耶識と染汚法の形づくる迷界は、相互に依據してゐると云はなければならない。なぜなら、阿頼耶識がなければ世界は存在しないが、世界が存在しなければ阿頼耶識は自ら主體となつて輪廻転生をするべき場を持たず、従つて悟達への道は永久に閉ざされることになるからである」

三島由紀夫の唯識についての思弁は輪廻転生から離れることはない。それが小説の主題だからであるが、『天人五衰』の安永透は二十歳になっても死ななかつた。松枝清顕→飯沼勲→ジン・ジャンの生まれ変わりとして二十歳で死ぬことが期待されていた透は服毒するものの、失明するだけに終わる。小説の大団円、本多繁邦は、松枝清顕のかつての恋人でその死の原因となり、奈良の帯解の寺で尼門跡となっている綾倉聡子に会いに行く。六十年ぶりの再会のはずである。しかし、聡子は本多とは初対面のふうであり、松枝清顕など知らないという。そんなはずはないという本多に、

「いいえ、本多さん、私は俗世で受けた恩愛は何一つ忘れはしません。しかし、松枝清顕さんといふ方は、お名をきいたこともありません。そんなお方は、もともとあらしやらなかつたのと違ひますか？ 何やら本多さんが、あるやうに思うてあらしやつて、實ははじめから、どこにもをられなんだ、といふことではありませんか？ お話をかうして伺つてゐますとな、どうもそのやうに思はれてなりません」

といい、さらに、

「その清顕といふ方には、本多さん。あなたはほんまにこの世でお會ひにならしやつたのですか？」

と続ける。

「記憶というてもな、映る筈もない遠すぎるものを写しもすれば、それを近いもののやう

に見せもすれば、幻の眼鏡のやうなものやさかいに」
ともいう。まさに唯識の思想なのである。そして、最後、

「しかしもし、清顕君がはじめからゐなかつたとすれば」と本多は雲霧の中をさまよふ心地がして、今ここで門跡と會つてゐることも半ば夢のやうに思はれてきて、あたかも盆の上に吐きかけた息の曇りがみるみる消え去つてゆくやうに失はれてゆく自分呼びさまさうと思はず叫んだ。「それなら、勲もゐなかつたことになる。ジン・ジャンもゐなかつたことになる。……その上、ひよつとしたら、この私すらも……」

門跡の目ははじめてやや強く本多を見据ゑた。

「それも心々ですさかい」

三島なりに解釈した唯識の思想を物語として展開して、見事というしかないのだが、このような結末を書いて、すぐに自衛隊に行つて腹を切るという行為にどうして結びつくのか、五十年が経つてもやはり謎のままに残される。阿頼耶識には血まみれになった種子が残ることになる。行基とはといえば、瑜伽唯識を学んで理解し終えるやいなや、利他の行動に移る。『瑜伽師地論』をひもとくと次のような一節に出会う。

「当に知るべし此の中正行の功德殊勝なる菩薩は自他を利せんが為めに勤めて正行を修し、利他の事を以て自事と為す。声聞、独覚は則ち是の如くならずと。諸の菩薩は利他の事を用つて自事と為るに由るが故に、一切の有情に於て自己の如き平等の心を起す。是の如き平等の心を起すに由るが故に、諸の有情に於て常に恩恵を施し、其の報を望まず。菩薩是の如く勤めて修行する時常に希望を發起し、彼をして利益安樂を得しめんと欲し、是の利益安樂の意樂に由りて常に能く不虛加行を起作す」

行基菩薩と人びとは彼を呼ぶ。『続日本紀』にすでにそう記されている。すでに声聞、縁覚の境位ではなく、利他の菩薩行を実践する真の菩薩だったのである。

行基の利他の行

瑜伽唯識を習得するや、行基は人びとの教化におもむく。『続日本紀』には「既にして都鄙を周遊して衆生を教化す。道俗化を慕ひて追従する者、^{ややも}動すれば千を以て数ふ。^ゆ所行く処和尚来るを聞けば、巷に居る人無く、争ひ来りて礼拝す。器に随ひて誘導し、^{みな}咸善に趣かしむ」とあった。自己が救済されるだけでなく他者もまた救済されなくてはならない。汚濁に充ちた世の中で呻吟しつつ、ともすれば悪に染まることもある人びとに魂の用いるべき用い方を教えて、善に赴かしめる。さらには^{みづか}親ら弟子等を率ゐて、諸の^{ぬみ}要害の処に橋を造り^{つづみ}陂を築く。^{ききみ}聞見ることの及ぶ所、咸来りて功を加へ、不日にして成る。百姓今に至るまでその利を蒙れり」とある。行政府がやらなければならない仕事を民間の僧侶が率先して、その指示のもとに集まる人びとを指導して成就させたというのであり、行政

府も得体が知れず、排除すべき宗教者、むしろ妖僧とみなしていた行基を認めざるを得ず、「豊桜彦天皇甚だ敬重したまふ。詔して、大僧正の位を授けたまふ」という事態になったのである。反体制派であったものが体制に取り込まれてしまったというような物言いはあまり意味がないであろう。そして、行基は「留止る処には皆道場を建つ。その畿内には凡そ卅九処」とあって、四十九の道場を造ったことが語られる。

12世紀に編まれた泉高父の『行基年譜』には年次を追ってその四十九院を挙げている。そして、天平十三年、行基七十四歳のところに、彼の関わった土木事業が列挙されている。土木事業の方から先に挙げてみる（続々群書類従本の『行基年譜』は誤字が多いといい、地名辞典などを参考にして適宜修正をほどこすことにする）。

【架橋6所】

泉大橋	山城国相楽郡泉里
山崎橋	乙訓郡山崎郷
高瀬大橋	摂津国嶋下郡高瀬里
長柄	西成郡
中河	〃
堀江	〃

【直道1所】

自高瀬生馬大山登道 河内国茨田郡・摂津国

【池15所】

狭山池	河内国丹比郡狭山里
土室池	和泉国大鳥郡土師郷
長土池	〃 〃 〃
薦江池	〃 〃 深井郷
檜尾池	〃 〃 和田郷
茨城池	〃 〃 蜂田郷
鶴田池	〃 〃 日下部郷
久米田池	〃 泉南郡丹比郷
物部田池	〃 〃 〃
崑陽上池	同下池 院前池 中布施尾池 長江池 摂津国河辺郡山本里
有部池	摂津国豊嶋郡箕丘里

【溝6所】

古林溝	(長3200丈、広6尺、深4尺)	河内国茨田郡古林里
崑陽上溝	(長1200丈、広6尺、深4尺)	摂津国河辺里山本里
同下池溝	(長1200丈、広6尺、深6尺)	〃 〃 〃
長江池溝	(長60丈、広6尺、深6尺)	〃 西成郡

物部田池溝（長60丈，広5尺，深5尺） 和泉国泉南郡
 久米田池溝（長2000丈，広5尺） 〃 〃

【樋3所】

高瀬堤樋 河内国茨田郡高瀬里
 韓室堤樋 〃 〃 韓室里
 茨田堤樋 〃 〃 茨田里

【船息2所】

大輪田船息 摂津国兔原郡宇治郷
 神前船息 和泉国日根郡日根里近木郷

【堀4所】

比売嶋堀川（長600丈，広80丈，深6丈5尺） 摂津国西成郡津守
 白鷺嶋堀川（長100丈，広60丈，深9尺） 〃 〃 〃
 次田堀川（長700丈，広20丈，深6尺） 〃 嶋下郡次田里
 大庭堀川（長800丈，広12丈，深8尺） 河内国茨田郡大庭里

【布施屋9所】

大江布施屋 山城国乙訓郡大江里
 泉寺布施屋 〃 相楽郡高麗里
 崑陽布施屋 摂津国河辺郡崑陽里
 垂水布施屋 〃 豊嶋郡垂水里
 度布施屋 〃 西成郡津守里
 楠葉布施屋 河内国交野郡楠葉里
 石原布施屋 河内国丹北郡在原里
 大鳥布施屋 和泉国大鳥郡大鳥里
 野中布施屋 〃 〃 土師里

『続日本紀』には「諸の要害の処に橋を造り^{つみ}陂を築く」とあったが、たとえば京都の南の
 広大だった巨椋池が姿を消したように、当時とはどこも景観を変えているだろうとはいえ、
 堤や橋があったらう河岸を歩いてみて、その「ぬみ」の意味を実感することは今でも難し
 くない。「治」という漢字がサンズイなのは、中国で世をおさめることはまず水をおさめる
 ことだったからであろう。氾濫すれば田畑を荒廃させるし、流れを手なずけることができ
 れば田畑を潤し穀物の豊穰をもたらす。また、川は交通を阻みもするが、交通路そのもの
 にもなって、物資や人の往来をむしろ促進させる。山城や河内には大きな自然の池があり、
 大河があり、摂津には海が開けていて、ヴェネチアのようにlaguna（潟）にはcanale（堀）
 をはり巡らせれば、それが行き来する通路にもなる。ところが、特に行基の故郷である和
 泉地方には数は多いものの、それぞれ小さな河川が東の山間から西の大阪湾までたがいに
 合流する暇もなく一気に流れ出て水が保たれない。日照りになると、水田耕作が不可能に



現在の狭山池

なるから、水を貯める人工的な池が必要になる。すべて水を治める「治政者」の仕事であるべきなのを、利他の精神に満ちた行基とその信奉者の集団が行ったことになる。

また、布施屋は慈善の旅人宿ということになるが、『続日本紀』和銅五年（712）正月十六日に、

「五年春正月乙酉，詔して曰はく、「諸国の役民，郷に還らむは，食糧絶え乏しくして，多く道路に饑ゑて，溝壑に転び^{うづも}填ること，その類少なからず。国司ら勤めて撫養を加へ，量りて賑恤すべし。如し死ぬる者有らば，且く埋葬を加へ，その姓名を録して本属に^つ報げよ」とのたまふ」

とある。

和銅三年（710）に平城京に遷都があつて，長安に模した大規模な城市の建設に諸国から人びとが徴発される。上京し，仕事をしている期間は貴重な労働力として食事も与えられようが，それが終わるとどうやら丸裸で故郷に帰らなくてはならなかったようだ。この記事，一瞬，誇張ではないかと疑いが生じるほどであるが，故郷にたどりつくこともできず，街道で飢え死にする人びとが多かった事実を語る。それに対して，朝廷もすこしは気が咎めたのか，国司らに対して帰国する人びとに撫養を加え，もし死体が溝や谷に放置されていたら丁重に埋葬し，死者の姓名を記して故郷の官衙に知らせよと命じたことになる。

同じく，和銅五年十月二十九日に、

「乙丑，詔して曰はく、「諸国の役夫と運脚の者と，郷に還る日，糧食乏少にして，^{いた}達ること得るに由無し。郡稲を割きて別に便^{ところ}の地に貯へ，役夫の到るに随ひて^{まにま}任に交易せしむ

べし。また、行旅の人をして、必ず錢を齋ちて資とし、因て、重担の勞を息め、亦錢を用ゐる便を知らしめよ」とのたまふ」

とある。先の詔にもあった役夫に運脚の者がここには加わる。諸国から租庸調を都に運ぶ人たちである。その人たちも帰途は食料が乏しく、背に米を担いだ分を炊いで凌ぐしかなく、それがなくなれば、餓えるしかなかった。郡衙では米を蓄えておき、それを錢をもった行路の人に売るようにしろといい、改元の理由になって、まだ流通のおぼつかないわが国最初の貨幣である和同開珎の流通を奨励したということになる。官衙のやることだから、中央からの通達のまま人びとのもった貨幣は米と交換できたのだろうが、政府は役夫や運脚夫たちに十分に和銅開珎を与えたのだろうか。

いずれにしろ、古代にあって、物見遊山の旅などなく、布施屋は政府に徴用されながらも、政府の恩恵を被ることがない、放っておくと飢え死にしかねない人びとの行路を助けるための施設だったということになる。

四十九院について

『続日本紀』は「道場」ということばを使い、それを四十九カ所に作ったという。それを四十九院と言い習わしているのは、弥勒菩薩の兜率天の宮殿には四十九院があったといい、それを踏まえるとされる。それらがどの地の、現存すればどの寺に当たるのか、学者によってその比定は多少異なっている。井上薫氏は『行基年譜』により、行基の年齢をおって時代順に四十九院を掲げているので、それを列挙してみる。

1, 慶雲元年 (704)	37 歳	家原寺	(和泉国大鳥郡家原)
2, 二年 (705)	38 歳	大修園院	(〃 〃 大村)
3, 三年 (706)	39 歳	蜂田寺	(〃 和泉郡横山)
4, 四年 (707)	40 歳	生馬山房	(大和国平群郡生馬)
5, 和銅元年 (708)	41 歳	神鳳寺	(和泉国大鳥郡大鳥)
6, 靈龜二年 (716)	49 歳	恩光寺	(大和国平群郡床室)
7, 養老二年 (718)	51 歳	隆福院	(〃 添下郡登美)
8, 四年 (720)	53 歳	石凝院	(河内国河内郡日下?)
9, 五年 (721)	54 歳	菅原寺	(右京三条三坊)
10, 神龜元年 (724)	57 歳	清浄土院	(和泉国大鳥郡葦田) 高渚寺
11,		尼院	(〃 〃 草部)
12, 二年 (725)	58 歳	久修園院	(河内国交野郡一条)
13, 三年 (726)	59 歳	檜尾池院	(和泉国大鳥郡和田)
14, 四年 (727)	60 歳	大野寺	(〃 〃 大野)
15,		尼院	(〃 〃 〃)

16,	天平二年（730）	63 歳	善源院	（摂津国西生郡津守）
17,			尼院	（ 〃 〃 〃 ）
18,			舟息院	（ 〃 兔原郡宇治）
19,			尼院	（ 〃 〃 〃 ）
20,			高瀬橋院	（ 〃 嶋下郡穂積）
21,			尼院	（ 〃 〃 〃 ）
22,			楊津院	（ 〃 河辺郡楊津）
23,	三年（731）	64 歳	狭山池院	（河内国丹比郡狭山郷）
24,			尼院	（ 〃 〃 〃 ）
25,			崑陽施院	（摂津国河辺郡山本）
26,			法禅院	（山城国紀伊郡深草）
27,			河原院	（ 〃 葛野郡大屋）
28,			大井院	（ 〃 〃 大井）
29,			山崎院	（ 〃 乙訓郡山崎）
30,			隆福尼院	（大和国添下郡登美）
31,	五年（732）	66 歳	枚方院	（河内国茨田郡伊香）
32,			薦田尼院	（ 〃 〃 〃 ）
33,	六年（733）	67 歳	隆池院	（和泉国和泉郡下池田）
34,			深井尼院	（ 〃 大鳥郡深井）
35,			吉田院	（山城国愛宕郡）
36,			沙田院	（摂津国住吉郡住吉）
37,			呉坂院	（ 〃 〃 御津）
38,	九年（737）	70 歳	鶴田池院	（和泉国大鳥郡山田）
39,			頭陀院	（大和国添下郡矢田岡本）
40,			尼院	（ 〃 〃 〃 ）
41,	十二年（740）	73 歳	泉橋院	（山城国相楽郡大粕）
42,			隆福尼院	（ 〃 〃 〃 ）
43,			布施院	（ 〃 紀伊郡石井）
44,			尼院	（ 〃 〃 〃 ）
45,	十七年（745）	78 歳	大福院	（摂津国西生郡御津）
46,			尼院	（ 〃 〃 〃 ）
47,			難波度院	（ 〃 〃 〃 ）
48,			枚松院	（ 〃 〃 〃 ）
49,			作蓋部院	（ 〃 〃 〃 ）

もちろん、そのままの形ではないとしても、現存している寺は、1の家原寺、4の生馬山房(竹林寺)、7の隆福院(霊山寺)、9の菅原寺(喜光寺)、12の久修園院、14の大野寺、15の尼院(華林寺)、25崑陽施院(崑陽寺)、33の隆池院(久米田寺)、41の泉橋院(泉橋寺)、45の大福院(三津寺)である。

【この論考は本学共同研究プロジェクト20連279「地域文化財の掘り起こしと活用の研究」の研究助成を受けた成果の一部である】

★引用しかつ参考にして大いに刺激を与えられた書物は以下の通りである。

『新日本古典文学大系 続日本紀 一～五』(岩波書店 1989～1998)

『東洋文庫 大唐西域記 1～3』(平凡社 1999)

『続日本の絵巻 玄奘三蔵絵 上・中・下』(中央公論社 1990年)

『行基年譜』(『続々群書類従 第三史伝部』国書刊行会 1907)

『大阪府の文化財』(大阪府教育委員会 1962年)

三島由紀夫『豊饒の海一 春の雪』『豊饒の海二 奔馬』『豊饒の海三 暁の寺』『豊饒の海四 天人五衰』(新潮社 1969～1971年)

凝然大徳／鎌田茂雄訳注『八宗綱要』(講談社学術文庫 1981年)

井上薫『人物叢書 新装版 行基』(吉川弘文館 2013年)

〃 「和泉国大野寺土塔の源流」(『奈良大学文化財学報』第一集 1982年)

森浩一「大野寺の土塔と人名瓦について」(『文化史学』第13号 1957年 ただし参照したのは『森浩一著作集 4』新泉社 2016年)

石田茂作『日本仏塔の研究 上・下』(吉川弘文館 2016年)

(2022年12月7日受理)

Southern Osaka: The Cradle of Japanese Buddhism (6)

UMEYAMA Hideyuki

Gyoki (行基), who was born in Izumi, currently a city in the southern part of Osaka Prefecture in Japan, became a bonze at Yakushi-ji temple (薬師寺). It was in this temple that he studied and mastered Yuga-Yuishiki (瑜伽唯識), the most highly developed Buddhist philosophy - and the most arduous to learn. Not satisfied with himself as a learning bonze in the closed monastery, however, he went out into the world to engage in missionary work and to strive to participate in various social contributions honoring the altruistic principle of Mahayana Buddhism. He gathered many devotional collaborators around him. He constructed bridges over rivers and harbors, dug reservoirs and irrigation canals, and built many lodging houses for poor travelers, some of which still exist as Buddhist temples. Herein, we trace the remnants of the works of Gyoki, in particular those located in Izumi, Osaka. The toponym of Fukai (深井) is supposed to have originated from Akai (闕伽井) which was dug by Gyoki as an offering of sacred water (闕伽 = aqua) to Buddha. Fukai still has Doto (土塔 = earth stupa), which is covered with tiles and has names of Gyoki's followers engraved on its surfaces. Much attention and pondering should be given to the fact that a half of those on the engraved list of follower names are women.

Keywords: Gyoki, Japanese Buddhism, Mahayana Buddhism, Osaka, history

